

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区名 福島区
学校名 大阪市立玉川小学校
学校長名 松下 淳則

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・大阪市立玉川小学校では、第6学年 75名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語、算数、理科のいずれの教科においても、全国平均および大阪府平均を上回る高い正答率を維持しており、全体的な学力は高い水準となった。

- ・ 国語：全国・大阪府平均を約6～7ポイント上回る結果となった。
- ・ 算数：全国・大阪府平均を約10ポイント上回る結果となった。
- ・ 理科：全国・大阪府平均を約7～9ポイント上回る結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

[国語]

全体的に高い正答率を誇り、特に「言葉の特徴や使い方」「我が国の言語文化」に関する問題で全国平均を大きく上回った。漢字の書き取りや文法的な知識を問う問題（例：問題2四ア「漢字を使って書き直す（このみ）」）で、正答率が83.1%と非常に高く、基礎的な知識が定着していることがわかった。

課題としては記述式問題「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかを見る」とされた問題（例：問題2三）では、正答率が69.0%と、平均正答率（61.3%）は上回っているものの、学校全体の平均から見ると低い傾向にある。

[算数]

全体的に高い正答率を維持しており、特に「数と計算」「図形」「測定」などの領域でも全国・大阪府平均を大幅に上回っている。基礎的な計算力「異分母の分数の加法の計算」（問題3（4））で正答率が91.5%と非常に高く、基礎的な計算力は十分に定着している。

課題としては、思考・表現を要する問題「分数の加法について、共通する単位分数を見いだし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つかを数や言葉を用いて記述できるかどうかを見る」とされた問題（例：問題3（2））では、正答率が32.4%と、全国（23.0%）や大阪府（23.5%）を上回ってはいるものの、学校の平均正答率と比較すると低い結果となった。

[理科]

算数と同様、全国平均・大阪府平均を大きく上回っており、特に「生命」を柱とする領域では63.9%と高水準です。基礎知識の定着「水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ」問題（例：問題4（2）イウ）では、正答率が63.9%と高く、基礎的な知識の理解は進んでいることが伺える。

課題としては科学的な思考力：「問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるか」を問う問題（例：問題4（1））では、正答率が43.1%と、全国平均（50.6%）や大阪府平均（49.2%）を下回っており、実験計画の妥当性を検討する力に課題が残る。

質問調査より

「自分にはよいところがあると思いますか」の項目では91.4%の児童が、肯定的な回答を示した。また、「人が困っているときは、進んで助けていますか」の項目では、肯定的な回答が95.7%であった。これまで異学年による「おはようタイム」の実施や学校生活の中で活躍できる場を設けたことで自己肯定感が育まれてきたと考える。

「理科が好きですか」の項目では88.6%の児童が、肯定的な回答を示した。これは全国平均と比べて非常に高い割合であり、理科の学習が将来、社会に出たときに役に立つと考えたり、学習したことを普段の生活の中で活用したりできているなど理科への興味関心の高さが

みられる。

PC・タブレットなどのICT機器の活用については情報を整理したり、プレゼンテーション（発表のスライド）を作成したりすることはできるが、PC・タブレットなどのICT機器を楽しみながら活用するまでには至っていない。今後も日常的な授業の場面で主体的・協働的に活用できるよう指導の工夫を図っていく。

今後の取組(アクションプラン)

【国語】

記述力向上に向けた指導の強化:単に答えを書くのではなく、「なぜその答えになるのか」を言葉や文章で説明する練習を日常的に取り入れる。短い文章から長い文章まで、構成を意識して書く機会を増やすようにする。特に、与えられた情報（資料）を基に、詳しく説明する練習を重点的に行う。

【算数】

「なぜそうなるか」を説明する活動の導入:計算問題や図形問題においても、単に答えを出すだけでなく、「どうしてその式になるのか」「なぜその考え方をしたのか」を言葉や図を用いて説明する時間を設定する。特に分数の加減法においては、共通する単位分数を見出す思考過程を、図や数直線を使って視覚的に表現する練習を繰り返すようにする。

【理科】

根拠に基づく考察・表現力の育成:実験結果や観察結果について、単に「～だった」と述べるだけでなく、「～という結果から、～と考えられる」のように、得られたデータと考察を結びつけて記述する練習を繰り返す活動を取り入れる。特に、実験計画の立案においては、仮説を立て、それを検証するための条件（制御変数、操作変数など）を明確に意識させる指導を行う。